【質保証を目指した試み】

学修成果の可視化と改善への取り組み

エビデンスベースドの自己評価システムによる自律的学修者の育成

共愛学園前橋国際大学　副学長　後藤さゆり

はじめに

本学は群馬県前橋市にある国際社会学部のみの単科大学で、「共愛＝共生の精神」を建学の理念とし、「国際社会のあり方について見識と洞察力を持ち、国際化に伴う地域社会の諸課題に対処することのできる人材の養成」を教育の目的としています。この目標を達成するために、英語、国際、情報・経営、心理・人間文化、児童教育の５つのコースを設置し、学科に匹敵するコースカリキュラムで専門性を獲得しながら、同時に他のコースの科目で幅広い知識を身につけることができるカリキュラムを展開しています。その教育方針は「学生中心主義」と「地域との共生」で、学生の主体的な学びに注力し、グローバルな視野に立ちながら地域と共に地域に学ぶ教育を展開しています。

本学は現在、文科省の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（GGJ）」「地（知）の拠点整備事業（COC)」「大学教育再生加速プログラム（AP）『高大接続改革推進事業』」「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の４事業に採択されており、既存のカリキュラムに加え、海外での PBL や地域でのサービスラーニングなど、より多様で実践的な教育プログラムの充実を図っています。これらの事業展開を通して、地学一体化教育の体制をより一層強化し、地元の産業界と協働して地域産業人材として活躍できる自律的学修者の育成に取り組んでいます。

これらの先進的な学びを可能にしているのが、ユビキタスキャンパスであり、新校舎 KYOAI COMMONS です。KYOAI COMMONS はアクティブラーニング専用に設計された学舎で、学生の主体的な学びを創り出す場所としくみがあります。互いに刺激し合うことで日々、新しい学びや学生主体のプロジェクトが生まれています。本学では、その他の校舎の普通教室やパソコン演習室、図書館もアクティブラーニングに対応した仕様になっており、これらの教育環境を活用して、本学の専任教員全員がアクティブラーニングに取り組んでいます。

本学では教育活動や学生生活を通して学生が卒業までに身につけるべき力を学修成果指標として開発するとともに、e ポートフォリオやステークホルダー調査によって学修成果を可視化し、教育改善につなげる仕組みを構築・運用しています。本講演

では、まず本学の教育実践の現状と課題についてお話し、次に自律的学修者育成に向けて学修成果を可視化するために導入された「エビデンスベーストの自己評価システム」と e ポートフォリオ Kyoai Career Gate（略称 KCG）の仕組みと運用についてお話します。

１．本学の教育の現状と課題

本学の教育は学生中心主義に基づいて実践されており、授業をわかり易くしかも深く理解するための教育改善に全教職員で取り組む中で、各教員が主体的にアクティブラーニング手法を取り入れ実践してきました。2015 年度の実績では、卒論に関する演習科目除く開設科目 529 科目中、アクティブラーニングを導入している科目は 433 科目で、比率にすると 81.9%に上ります。さらに、本学はアクティブラーニングの比率がとても高いだけではなく、より高度なアクティブラーニングを実施していることに大きな特徴があります。アクティブラーニング科目の中で PBL（問題解決型学習）を実施している科目数は 140 科目で、これはアクティブラーニング科目の 32.3%、総科目の 26.5%にあたります。これだけ多くの PBL が実施できる背景には、地学一体化教育の体制が整っていることがあります。

例えば、地域と協働しながら学ぶ PBL の一例として、「電子商取引演習」という科目があります。これは仮想企業の見本市「トレードフェア」に参加することを目標に、仮想企業を立ち上げ運営する模擬体験を通して、電子商取引や社会に出て必要となる知識・技能を総合的に学修する授業です。新商品を開発し、実際に企業や自治体と連携しながら商品化を進めます。その中で、毎年実際に商品化され販売される商品があり、店頭販売だけでなく、学生が販促活動にも関わります。海外における PBL の一例では、群馬県の企業サンデンホールディングスのタイ現地法人との協働で実施される「ミッションコンプリート研修」や、伊勢崎市教育委員会との協働で実施される「中学生のアメリカ研修サポートインターン」などがあります。

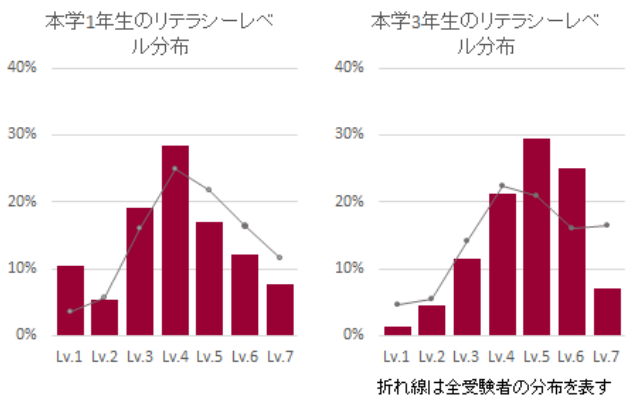

図 1　2015 年　PROG(河合塾)　結果

これらの授業を通して、現代社会で求められる能力が身についていることが、外部のアセスメントテストや調査で明らかになりました。図 1 は PROG テストで、知識を活用して問題解決する力（リテラシー）に関する結果です。リテラシーレベルは「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」という 4 要素のテストの総合結果です。1

年生は 2015 年の 6 月、3 年生は 11 月に実施しました。1 年生の結果では全受験者の平均に比べ、レベル 1 の割合が高く、レベル 5 以上の割合が低いのに対し、3 年生ではレベル 5・6 の学生の割合が平均を上回っています。このことから、本学の授業では「知識を活用して問題解決する力」を伸ばすことができていると考えられます。その一方で、レベル 7 の割合が平均を下回っており、現在のカリキュラムでは優秀な学生を効果的に教育できていないという課題も明らかになりました。

図 2 はオーストラリア教育研究所と河合塾とが共同で主催した JUES の結果を示しています。この調査には本学を含む全国 19 大学（国立：8 大学、私立：11 大学）の 1 年生と 4 年生（or 6 年生）計 6967 名が回答しました。この結果から本学の学生は他大学の学生に比べて、本学の教育等について高く評価していることが明らかになりました。その中でも「自主的に学習できる自信」、「話す力」、「書く力」、「批判的思考力」、「複雑な問題を解決する力」、「グループで協調する力」、「専門分野に関する知識」、「仕事関連の知識と技術」において、1 年生の回答は他大学とほぼ同じであるのに対し、4 年生の回答は他大学の学生の回答に対して、統計的に有意に差がある結果となりました。このことからも、本学のアクティブラーニングを中心とするカリキュラムが学修成果を上げていることがわかりました。その一方で、将来の見通しを持たない学生は学修意欲が低いことや、授業外学修時間が他大学と比較しても多くないことなど課題も明らかになりました。

これらの課題を改善するためには、キャリア教育の充実によって学修意欲を高めることや、学生が自ら目標を定めて主体的に学修に取組むことを促すことなどが求められます。その具体的な方策としては、e ポートフォリオ等を有効活用し、学修習慣の形成を促すとともに、学修成果の可視化を進めることが考えられます。

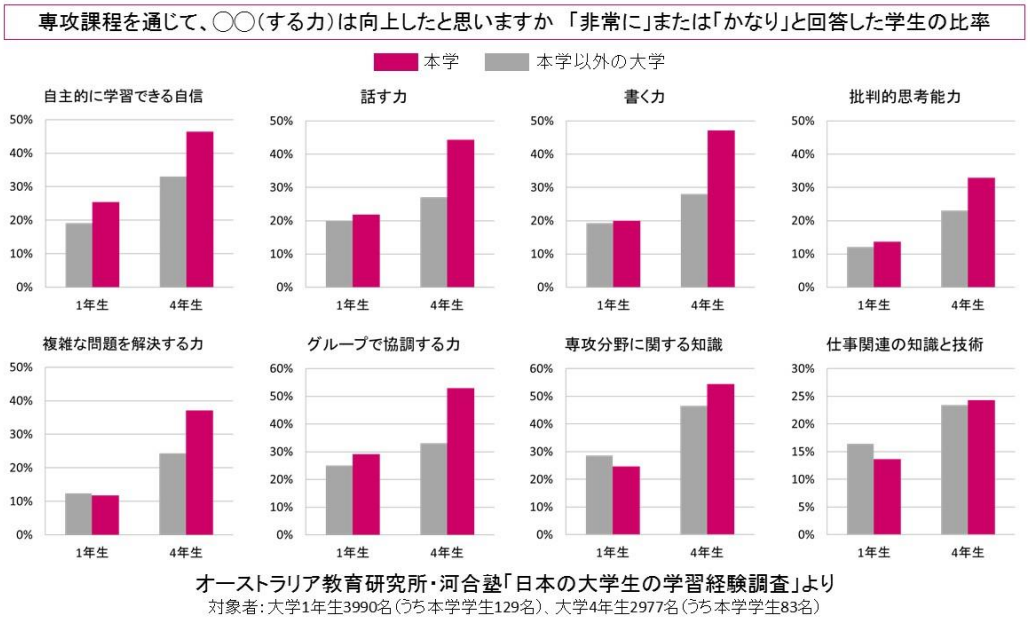

図 2 日本の大学生の学習経験調査（JUES）結果

この改善に向けた取り組みのいくつかは、本年度より実施されています。例えば、キャリア教育の充実のために「キャリアプランニング（Ⅰ~Ⅳ）」という授業を1年生から3年生を対象に開設しました。また、2015年度に導入したeポートフォリオは、主体的に学修成果を可視化して自分のキャリアにつなげることができる機能を新たに追加して本格的な運用を開始しました。

そこで、学修成果を可視化するために導入した「エビデンスベーストの自己評価システム」と、本学のeポートフォリオKyoai Career Gate（略称KCG）についてお話します。

２．自律的学修者育成のための「エビデンスベーストの自己評価システム」

本学では、学修成果の可視化を進めるにあたり、本学の教育方針やカリキュラム、ディプロマポリシーに鑑みて、自律的学修者の育成に向けた「エビデンスベーストの自己評価」という考え方に至りました。

これまで述べてきたように、本学では地学一体化教育を進めており、正課の授業でも地域や海外でのアクティブラーニングが多いだけでなく、準正課（卒業要件には含まれないけれども、教育意図をもって大学が推奨する活動）を含めた学内・学外活動や正課外活動が多く存在します。さらに、学生は大学とは別組織での活動やアルバイトも行っています。学生はこれらの学修・活動の総体として多様な能力を身につけ成長していきます。この様な状況の中で、学生の学びの総体と正課で身につけた能力を区別して、学生の成長を可視化することは困難ですし、場合によっては授業での教員による評価の総体と、学生自身が認識する自分の成長が乖離してしまうことも出てくるかもしれません。本学では学びを通して深く自己を理解し、自ら目標をもって成長していく力をもつ自律的学修者を育成することが、学生中心主義の教育指針に最も合致していると考えました。そこで、学びの総体を評価する判断材料を最も豊富に持っている学生を、評価される側ではなく評価する側に位置づけ、学生の自己評価を可視化の1つの軸に据えることにしました。

大学には「学生が何を身に付けたか」という観点から、学生の学修成果を把握・評価して卒業を認定する説明責任が求められます。そのため、本学では授業における評価を改善していくことと同時に、学修成果の把握の方法として間接的な方法に位置付けられる学生の自己評価を重視し、より精度を高める工夫を検討しました。そして開発に至ったシステムが「エビデンスベーストの自己評価」です。学修成果の把握・評価を学生の自己評価に委ねる上での課題は、学生が根拠のない偏った自己評価を行うことです。その課題を解決するために、自己評価のための明確な規準を提示するとともに、e ポートフォリオに蓄積した多様な学修成果を自己評価のエビデンスとして活用して判断できるようにシステムを整備しました。

３．学修成果指標「共愛 12 の力」と「共愛コモンルーブリック」

ここでは本学の卒業時に見つけるべき力の規準として策定した学修成果指標「共愛 12 の力」と、学生の自己評価における明確な基準を明示した「共愛コモンルーブリック」についてお話します。

まず、2014 年度に前述した建学の精神（学則第 1 条)、および、教育の目的（学則第 3 条）に定める本学の目指す人材像に鑑みて、卒業時に身につけておくべき到達目標であるディプロマポリシーを知識・技能・態度の面から見直し、4 つの能力として明示しました（表 1 参照)。

2015 年度には、このディプロマポリシーと学士力を中心とし、社会人基礎力、OECD のキー・コンピテンシーといった汎用的スキルの要素を加えて検討し、全教職員の意見を求めたうえで本学の学修成果指標として 4 つの軸・12 の力にまとめました。さらに本学と「地域人材育成及び地域文化発展のための連携に関する協定」を結んでいる前橋商工会議所に協力を求め、地域の企業に求める人材像を尋ねるアンケーを実施しました。このアンケート結果と 12 の力との整合性を検討した上で、本学の学修成果指標「共愛 12 の力」を確定しました。

次に、「共愛 12 の力」の達成度を評価するために「共愛コモンルーブリック」を策定しました。専任教員全員で 12 の力のレベルを検討し、最終的なルーブリックを完成させました（表 2 参照)。学生は自らの学びを振り返り、自己の姿と共愛コモンルーブリックと照らし合わせることで、現在の自らの力を多角的に評価できるようになっています。ルーブリックを用いて自分で能力を評価することは、次の目標を立てるうえで大きな役割を果たします。さらに、学生が就職等で自分の強みを表現する際に、企業の求める力を自分の具体的な学修や活動と結びつけて説明したりアピールしたりするうえでも役立てることができると考えています。

表１　本学のディプロマポリシー

本学は、学則に定める在学期間を満たし、かつ共愛コア科目・外国語科目・専門科目・演習科目・個性的選択科目などからなる所定の 124 単位を修得した学生に対し、下記に掲げる能力を獲得したと認定し、学士（国際社会）を授与します。

1. 地域社会の諸課題への対応能力
2. 国際社会と地域社会の関連性についての識見
3. 問題を発見し解決するための分析能力・実践的技能
4. 国際化社会に対応できる十分なコミュニケーション能力

表２　共愛コモンルーブリック

4つの軸	12の力	12の力の定義	レベル 4	レベル 3	レベル 2	レベル 1
識見	共生のための知識	多様な存在が共生し続けることができる社会を築いていくために必要な知識	共生のための社会の諸課題に対応するための、新たな知見を生み出すことができる。	共生のための社会の諸課題について、知識を組み合わせて、自分の考えを説明することができる。	所属するコースの専門的な知識を習得している。	文化、社会、地域、人間、自然、外国語に関する体系的な知識の習得に努めている。
	共生のための態度	多様な存在が共生し続けることを尊重する考えや行動	多様な存在が共生可能な社会のために、考え、学び、行動し続けることができる。	多様な存在が共生する社会の中で、自分ができること、やらなければいけないことについて考えることができる。	社会が多様な存在で構成されていることを理解し、多様性を尊重する気持ちを持っている。	自分の態度や信念は他の文化やコミュニティの態度や信念とは異なっているという自覚をもっている。
	グローカル・マインド	地域社会と国際社会の関わりを捉え、両者をつなぐことで、地域社会の発展に貢献する姿勢	地域社会と世界をつなぎ、自らが暮らしていく地域の発展に貢献するビジョンを持っている。	様々な学びを通じて、地域社会と国際社会の関わりについて自分なりの考えを持っている。	母国以外の政治・経済・文化・社会・歴史について知りたいという意欲がある。	自らの暮らし、学びの場である地域の経済・文化・社会・歴史について知りたいという意欲がある。
自律する力	自己を理解する力	自己の特徴、強みや弱み、成長を正確に理解する力	様々な経験を振り返ることを通じて、自分の特徴、強みや弱み、成長を客観的に表現でき、将来に向けての自分をイメージすることができる。	様々な経験を振り返ることを通じて、自分の特徴、強みや弱み、成長を客観的に理解することができる。	自らの興味関心や特徴、長所や短所について考えながら、授業や学内外の活動に参加している。	授業や学内外の活動を通じて、自分の興味関心のありかを確認したり、新たな興味の対象を見つけようとしたりしている。
	自己を制御する力	ストレスや感情の揺れ動きに対処しながら、学びや課題に持続して取り組む力	ストレスや感情の揺れ動きと上手く付き合いながら、大きな困難に挑戦し、価値あることをやり遂げた経験と自信がある。	ストレスや感情の揺れ動きと上手く付き合いながら、困難な課題に取り組み続けることができる。	達成が容易でない課題でも、最後まで粘り強く取り組むことができる。	設定した目標に向かって、取り組むことができる。
	主体性	人からの指示を待つのでなく、自らやるべきことを見つけ、行動する力	達成困難な課題であっても、解決のための方法を模索しながら、自ら動き続けることができる。	自らすべきことを見つけ、行動し、その結果を振り返り、次の行動に活かすことができる。	指示を待つのではなく、自分の状況を判断した上で、自らすべきことを見つけ、行動している。	指示を待つのではなく、何をすればよいか、するべきかを見つけようとしている。
コミュニケーション力	伝え合う力	コミュニケーションにおいて、相手の意図を正しく理解し、自分の意図を効果的に伝達する力	レベル 1～3 を複数の言語で行うことができる。	適切なコミュニケーション手段、スキルを用いて、自分の伝えたいことをわかりやすく表現することができる。	コミュニケーションの状況や相手の立場を考慮して、伝達方法を工夫することができる。	発言や文章の論点を正しく理解することができる。
	協働する力	他のメンバーと協調しながら集団として目標に向けて行動する力	良いグループになるための条件を常に模索し、他のメンバーへの働きかけを通じて、グループの目標達成に貢献することができる。	多様な意見や立場、利害を把握した上で、グループ内の関係性構築に貢献できる。	グループでの自分の役割、責任を理解し、自分なりにグループに貢献することができる。	他者の発言をよく聞き、会話の流れをしっかり追いながら、グループに協力することができる。
	関係を構築する力	様々な他者と円滑な関係を築く力	自分とは異なる価値観や文化を持つ他者や、バックグラウンドが大きく異なる他者とも円滑な関係を築くことができる。	互いの状況や立場についての理解を深め合うことにより、相手と円滑な関係を築いていくことができる。	相手の状況や立場を理解し、共感を示しながらコミュニケーションすることができる。	自分の気持ちを一方的に伝えるだけでなく、マナーを守り、相手を尊重してコミュニケーションすることができる。
問題に対応する力	分析し、思考する力	様々な情報を収集、分析し、論理的に思考して課題を発見する力	必要な情報を収集し、多角的な視点から分析を行うことで、新たな課題を発見することができる。	情報・資料の分析を通じて、物事を多面的に見ることにより、問題の新たな側面を発見することができる。	自ら情報・資料を収集し、それらを分析し、自分なりに考察することができる。	与えられた情報・資料を客観的に読み取ることができる。
	構想し、実行する力	課題に対応するための計画を立て、実行する力	収集した情報や知識を活用しながら合理的な計画を立て、着実に実行することができる。	計画の進捗状況を確認し、必要に応じて計画を修正しながら、着実に実行していくことができる。	大きな問題が生じなければ、自分の立てた計画通りに実行することができる。	取り組むべき物事に対して合理的な計画を立てることができる。
	実践的スキル	現代社会において必要な基本的スキルと自らの強みとなる実践的スキル	問題解決に役立つ様々なスキルを組み合わせて、状況に応じて柔軟に活用することができる。	自らの強みとなるスキルを身につけ、問題に対応することができる。	学びに必要な基本的な事柄を自らのスキルとして活用できる。	学びに必要な基本的な事柄（コンピュータの使い方やレポートの書き方など）を理解している。

一方で、正課の授業においてはシラバスの中で「共愛 12 の力」との対応を明示しています。到達目標や授業内容、教授方法に照らし各教員が「共愛 12 の力」のうちの一つ以上、最高で 6 つの力を選択することができます。その結果は後述する本学の e ポートフォリオである KCG に履修情報として取り込まれて、学生の自己評価の際のエビデンスの一つとして明示されます。

この共愛コモンルーブリックは学生の実態やカリキュラムの充実に応じて修正し、必要に応じて更新していく予定です。また、これを用いて学修成果を数量化することで、カリキュラムの構造化を進めることができるため、カリキュラムを見直す具体的な観点を明確にすることができます。

４．KCG と KCG+S の仕組みと運用

この様に学生がコモンルーブリックを用いて自己評価するためには、根拠となるエビデンスが必要になります。そこで、本学ではeポートフォリオをさまざまな学修成果の蓄積と振り返りに活用するだけでなく、自己評価のエビデンスとして活用できるシステムとして構築しました。KCG は既成のeポートフォリオシステムに独自の機能を追加して 2014 年度からの試験運用期間を経て 2015 年度後期より本格的な運用を開始し、2016 年度から「共愛 12 の力」の自己評価機能の利用を開始しました。

図 3 は学生用の KGC のトップ画面です。トップ画面には、左側のプロフィールの下に「共愛 12 の力　自己評価」のセクションが 1 年次から 4 年次まで設けられています。中央には授業の学修成果物を蓄積したり、授業外学修としてのグループワークなどを記録したりする「学内活動」と、語学留学、海外旅行、ボランティア、アルバイトなどを記録する「学外活動」、「資格取得」、「読書履歴」のセクション、右側には目標と振り返りを記録する「学年振り返り」と履修年度ごとの「授業振り返り（履修情報一覧）」を記録できるセクションがあります。学生に学修や活動の多様な記録をなるべく多く蓄積してもらうために、記録のしやすさを優先して単純な区分にとどめました。

図 3　学生用 KCG トップ画面

また、学生は学内だけでなく学外からでも KCG にアクセスすることができ、いつでもどこでも学修や活動の記録を投稿したり、確認したりす

図 4　KCG 共愛 12 の力にタグ付けされた投稿内容の横断検索画面

図 5　KCG　自己評価とエビデンス記入画面

ることができます。KCG の利用は子本的に学生に委ねられていますが、自己評価のエビデンスとして記録を活用するためには、より多様な記録の蓄積が重要であることから、2016 度から初年次教育科目である「基礎演習」の授業に関する記録を義務づけたり、専任教員に授業での利用を呼びかけたりするなどして、KCG の利用を通した学生の学修習慣の定着に取り組んでいます。

2016 年度からは、4 月のオリエンテーション期間にコース別の学年毎で担当教員が同席するリフレクションの時間を設け、学生に KCG の「共愛 12 の力　自己評価」と「学年の振り返り」に記入することを義務づけました。学生はまず、図 4 に示すように、12 の力毎に学修や活動の記録を横断検索して、蓄積した学修記録の一覧を確認したり、関連する授業の履修状況を確かめたりして自分の成長のエビデンスを確認します。次に、図 5 に示す自己評価の画面で、ルーブリックを用いて 12 の力毎にレベルを選択し、その下に「エビデンスにした活動や授業」について記載します。さらに、「学年の振り返り」では、これを踏まえて自分の学びや成長を 4 つの軸ごとに振り返り、成長と課題を明確にするとともに、新年度の学びの目標を立てて記入します。

この様なリフレクションを通して自己評価する力は、学修成果指標の 4 分類のひとつである「自律する力」を身につけることでもあります。そのため、自己評価の妥当性を確保し、その力の育成を支援するために、e ポートフォリオに書き込まれた振り返りの記録を資料として、全学生を対象に担当教員とのリフレクション面談も実施し

図 6　KCG+S　トップ画面

ていく予定です。

さらに、KCG は KCG+S（ショーケース）の機能を備えています。学生は KCG に蓄積した様々な学修活動と学修成果物の中から、特に自らの特徴と成長を示す記録を「学びと成長のハイライト」として選択し、自動的に個別の学外公表ページを生成することができます（図 6 参照）。この URL を伝達することで、特定の学外者に対して自らの学びの記録を公開できます。この KCG＋S は就職活動時における「公開履歴書」としての利用を想定していますが、同時に、学生に対して e ポートフォリオを活用する意義を明確にし、学修成果を自分の成長として客観的に意味づけ、他者を納得させるだけの成長のエビデンスを蓄積するよう意識づける役割も持っています。さらに、大学にとっては、学生が身につけた力としての学修成果を、より効果的に公表する方法の一つとして機能するものでもあります。

KCG を中心とした「エビデンスベーストの自己評価システム」は、学修成果の指標を学生自身が主体的につくり上げるという経験を通じて、自律的学修者としての成長を促すための仕組みです。成績をはじめとする他者から与えられる成果の指標も、成績にはあらわれない学内外での広範な学びの経験も、すべて自らの成長と課題を示す手がかり＝エビデンスであるという認識を育むことで、経験から自らの姿を振り返り、課題を見つけ、次の目標に向かって自律的に歩んでいく「学び続ける力」を伸ばしていくことができると考えています。

５．おわりに

学生の自己評価やその他 KCG に蓄積された情報は、大学での組織的な IR（institutional research）の取り組みにも活用していく予定です。2015 年度より個々の学生に紐付いた学修関連データを統合したデータベースを構築し、教育活動の点検、改善に繋がる様々な分析を本格的に開始しています。学生の自己評価データや KCG 上の活動履歴から有用な情報を抜き出し、データベースに統合することで、より多角的な視点からの分析が可能になります。また、エビデンスベーストの自己評価の手続きの妥当性についても他の客観的データとの関連性の分析に基づき点検、改善してい

く予定です。

KCG を活用した一連の取り組みは学修成果の多角的な可視化を可能にします。学生自身は日々の学修成果の蓄積とリフレクションによって自らの成長と課題を明確化できます。教職員は KCG 上のデータの閲覧やリフレクション面談を通じて個々の学生の学修状況と学びに対する認識を共有することで、より適切なメンタリングをすることができます。加えて、KCG のデータに基づき個々の授業やカリキュラムの見直し等の教育改善を行うことができます。また、地域社会、ステークホルダーに対しても KCG+S によって、学生自身が学びの成果を見せていくことが可能になります。KCG を活用して学生自身、教職員、そして社会に対して学修成果をより見えるようにする仕組みを構築し、IR などの活動を通じてさらに仕組み洗練させていくという本学の組織的な取り組みによって、学修成果の可視化、カリキュラムの質保証、アカウンタビリティの達成といった大学の今日的な課題に対応していきたいと考えています。